

本を選ぶ

NO.418 2020年(令和2年)3月20日

●発行／ライブラリー・アド・サービス

<http://www.las2005.com>

本社 〒335-0004 埼玉県蕨市中央5-20-1 TEL=048-432-3726

●<ろん・ぼわん>藍 続々

●紙魚の繰り言 第27回

●鳥の目 77

●●●●●ろん・ぼわん●●●●●

藍 続々

藍という染料の製法や由来が気になったきっかけは『貴婦人と一角獣』（トレイシー・シュバリエ／木下哲夫＝訳／白水社／2013年／白水Uブックス）の作中に登場した紺屋だった。中世ヨーロッパの物語だ。貴族の注文で豪華な壁掛けの制作を引き受けた機織り職人は、藍染め職人から青く染められた美しい糸を仕入れなくてはならない。

作中に登場する機屋ジョルジュ・ド・ラ・シャペルの娘アリエノールは、取引先の藍染め職人に嫁がされるのを逃れようと、必死になる。染料を作り出す過程で否応なく発生するおぞましいほどの悪臭のせいだった。“あの臭い——藍を定着させるときに漬ける発酵した羊の尿の臭気——があるために、紺屋は何世代も前からいとこ同士しか結婚できなかった”。(164頁)

アンモニアを加えて色素成分を定着させるなどして染料が生成されているのは古くから知られているようだが、羊の尿というのがどうにも気になる。まずは、原文がどうなっているか覗いてみる。幸いハーパーコリンズ版の電子書籍をすぐに入手できたので、本文に当たると、“the fermented sheep’s piss”とある。それを手がかりにあれこれリサーチを試みるも、ちょっとばかり調べたところでは

かばかしい結果は得られない。日本の伝統的な藍や藍染についてはそれなりの資料が参照できるからある程度は分かるとしても、原作者が参考としたのはあくまで欧米の資料。しかもおそらくは中世にまで遡って歴史的に扱った文献であるに違いない。中小規模の図書館では、どうしてもこの分野の資料は限られる。

そこで東京都立中央図書館にレファレンスを依頼してみた。昔とは違って電子メールで申し込めるのはありがたい。随分ハードルが下がったと実感出来る。だが、こちらが具体的に何が知りたいのかを資料名を挙げて明確に伝えておくのが肝心だと思う。

1週間ほどで受け取った回答は手堅い内容で、さすがにプロの仕事ぶりを見たという印象だ。

回答内容は、「都立図書館の蔵書検索およびオンラインデータベース、インターネット等を<染料><顔料><歴史><藍><タイセイ><大青><ウオード><インディゴ><尿>等のキーワードを組み合わせて検索し、該当した資料やサイトを調査しました。残念ながら、藍(タイセイ)を定着させる際に羊の尿を使っていたという記述のある資料は見出せませんでした。」というものだった。さらに参照した資料が具体的に挙げられ、その中で参考になりそうな記述が引用されていた。結局のところ、獸尿に関する手がかりまでは至らない。

分かったのは、先ず原材料であるタイセイという植物の葉を発酵させ、乾燥して固める。次に青の色素成分を抽出するためにアンモニアなどのアルカリ成分が必要となる。臭気は避けたい。(埜村 太郎)

月はいつまでも

前回、ある種の死と再生の物語には、「死と再生の循環がいつまでも続くことと、再生する存在の同一性」が重要だと指摘しました。よく考えてみると、正確な表現ではありませんでした。死と再生の循環の継続と同一性を同じことのように、ごっちゃにして書いていました。

たとえば、「月」という存在がみちかけの過程を少しずつ一日一日と果てしなく繰り返すことによって、たとえ姿を消していたとしても、月は再び甦ることが予想されるのと同時に、消える前の月と甦った後の月が同じ月だと信じることができるのです。それゆえ、死と再生の物語が成り立つのだと考えたわけです。つまり、死と再生の循環による継続性が同一性を支えることによって、死と再生の物語が成立するということです。

しかし、さらに突き詰めて考えてみると、この理屈、順番が逆ではないかと思いつきました。要するに、死と再生の過程の中で、ある存在の同一性が確認、保証されることで、死と再生の循環による継続性が認められるのです。ひいては、永遠の命という継続性を願うために、死と再生の物語が語られるということにもつながるでしょう。「ねむり姫」の昔話で言えば、誰の侵入も許さない茨の森によって同一性が保証され、姫が目覚めとともに全ての物が動き始めることで継続性が明らかになるわけです。

エジプトの神ラーが生誕と死を繰り返して永遠の時を旅するという生死観もそこから生れます。死と再生の過程を果てしなく繰り返す「月」を見て、尽きることのない命を、いにしえの人は思ったのでしょうか。

『月の満ち欠け』

そこで取り上げておきたいのが、第157回直木賞受賞作（当時、佐藤正午が今頃直木賞を受賞するのかと驚いた記憶がありますが）、佐藤正午作

の『月の満ち欠け』（岩波書店／2017）です。こちらは簡単に言うと、月の満ち欠けのように、人が死んで何度も再生する物語なのですが、SFやホラーではないので、死んだはずの人間が生き返るわけではありません。映画『キャットウーマン』では主人公が文字通り甦りますが、この物語では主人公（？）の女性は別人として生れ変わるので、それぞれ異なる家族のもとに。ただし、前世、前々世、前々々世と過去世の記憶を持っているので、継続はしています。しかも前の人格が亡くなった直後に次の人格として生れていることが明らかになってきます。しかし、同一人であると言えるかどうかは、物語の世界での話ですので、最終的には読者の判断にかかっているのではないのでしょうか？

岩波書店の内容紹介を少し引用すると、「あたしは、月のように死んで、生まれ変わる——目の前にいる、この七歳の娘が、いまは亡き我が子だというのか？ 三人の男と一人の少女の、三十余年におよぶ人生」

この物語では、一人の女性が現世に残った恋人に再び会うために、3度生れ変わります。ただ、なにしろ現代の日本を舞台に設定しているので、生れ変わったという事実を証明すること、すなわち同一性の証明が困難を極めます。「るり」という名前だけは2度名乗ることができます（自分を生んでくれる母親の夢に登場して依頼するという手段で）、名前だけでは偶然の一致で片付けられてしまうでしょう。

また、生れ変わるたびに「るり」が自らの前世の記憶に目覚めるのは、つまり継続性が明らかになるのは7歳の時ということになっています。そういえば、グリムの昔話の「白雪姫」で継母の妃が鏡に問いかけて、白雪姫の方が美しいと言われるのは姫7歳の時でした。7歳というのは何か意味があるのでしょうか？

しかし、自分が生れ変わったことを証明するた

めに、本人や家族以外の他人には知り得ないはずの事実や物を提示したからといって、人は素直に信じることができるのでしょうか？ それと、前世の記憶が確かに過去のものであったとしても、記憶が一つの人格を形成すると言えるのでしょうか？ また、7歳までの独自の人格はどうなるのでしょうか？ それでも生れ変わりなののでしょうか？ というような様々な疑問が湧いてきます。いや、これはファンタジーなのだから、深く考えないで楽しめばいいのだと思いますが。

いずれにしても、同一性がカギです。空にある月は表面の模様から、同じ月だと推測できますが、姿形、年齢も違う人をどうやって同じ人格ととらえさせるのか、悩ましい問題です。それも、物語の中の世界で認めさせ、物語の読者も納得させないといけないのです。『月の満ち欠け』の中で登場人物に納得させている一つは、何気ない仕種です。無防備なところに真実があらわれるというのは納得します。作者としては「瑠璃」という名前が大きなカギなんだろうと思いますが、あの手この手で登場人物を、あるいは読者を納得させようとしているところが物語の中心です。要するに、同一性が担保されれば、継続していること、つまり、生れ変わりであることが認められます。

生れ変わりは映画にもありました。たしか、ジョン・ボイト主演で。ネットで調べてみると、1991年公開の『エタニティ 永遠の愛』だと思われます。ストーリーは、自分の前世を夢で見たテレビ番組のレポーターが、ある日前世の恋人にそっくりな女優と出会う。前世で二人の恋を妨害した男も再び現代に登場し、二人の仲を引き裂こうとするが、敵役の悪事を暴き、愛と正義を現代で全うさせるというものだったようです。

この場合は顔が同一性の根拠です。映画ですから、その方が分かりやすい。また、生れ変わるのは、3人だけでなく、ソウルメイトと呼ぶべき数人が生れ変わったという設定だったと記憶しています。もっとも、手塚治虫の『火の鳥』も生れ変わりを

描いているし、日渡早紀の『ぼくの地球を守って』（白泉社／1986～1994）もありました。死と再生の物語は、様々なバリエーションを持って広がっているのです。

闇に帰る

さて、前回エジプト神話の神ラーは天の女神ヌトから生れ、旅が終わると、ヌトの体の中に帰り、再び生れ出る時を待つということを紹介しましたが、この再び生れ出る時を待つヌトの体の中というのは、言うまでもなく、お腹でしょう。母の胎内の闇に包まれて眠るのです。この闇は何を意味しているのか、気になっています。そうですね。スタンリー・キューブリックとアーサー・C.クラークの映画『2001年宇宙の旅』の最後で、地球の悠久の歴史を見守るスターチャイルド（胎児？）のイメージがありましたが、あれに近いでしょうか。

実は、子どもの頃、一人で風呂に入れるようになってからの話ですが、風呂場で体を洗ってから、風呂桶につかっている時に、風呂桶の中に体を全部入れて、頭の上のふたを閉めた真っ暗な中でしばらく過ごすという遊びをしていました。まあ、5分くらいのことですが。心地よかったというか、面白かったです。怖いと感じたことはなかったように思います。

風呂のお湯と頭の上のふたの間に、適度な空間がなければいけません。ふわっと温かくて、たぶん少しぼーっとして、落ち着いた気分になったような気がします。

今、大人になって考えてみると、あれは胎内帰帰の願望の現れであると解釈してしまいましたが、強引でしょうか。同じような経験をお持ちの方は是非その経験をお聞かせいただきたい。

死と再生の物語では、死んだ後、再生する前に闇にとどまることによって、新しい力を得ます。大食いネコの系列の話でも、同じではないでしょうか？ 詳しくはいずれまた。

(さかべ たけし)

鳥の目 77

—シベリアの森と鳥 ～チャーホフが見たタイガ～—

為貞 貞人

「もう五月、ロシアでは森は青々としてさよなきどり小夜鳴鳥がさえずり、南のほうではもうとっくにアカシアやライラックの花が咲いているというのに、ここ、チュメニからトームスクへの街道すじでは、大地は褐色で、森は丸裸、湖には氷がどんよりと光って、岸べや谷あいにはいまだに雪が残っている…」。

1890年、チャーホフが悪路や川の氾濫などで困難を極めたサハリンへの旅の途中で書き送った書簡などからまとめられた『シベリアの旅』（松下裕訳／ちくま文庫／1994）の冒頭の一節です。

チュメニからトームスクにかけてはウラル山脈の東、オビ川流域の西シベリア低地で、湖沼が多く、大部分が針葉樹林帯のタイガや森林ステップで、5月は南から戻る渡り鳥でにぎわいます。

ここでまずチャーホフの心を揺さぶったのが鳥の群れでした。「生まれてこのかた、こんなにたくさんの野鳥を見たことは一度もなかった」と感嘆、カモの群れが野づらを歩き、水たまりや道ばたの溝を泳ぎまわり、箱馬車の屋根すれすれに舞いあがり白樺林へ飛んでいく光景を描きます。

「ひっそりした中に急に聞きおぼえのある美しい旋律がひびきわたるので、眼を上げると、さほど高くない頭上にひとつがいのツルが見えて、なぜか、ふつとうら悲しくなってくる」と旅の心情を吐露し、「雪のように真っ白なハクチョウが列をつくって飛んで行き、いたるところにシギがうめくような声を立て、カモメがいない」となじみのある鳥たちに慰めを覚えています。

チャーホフは4月19日モスクワを鉄道で出発、ヤオスラヴリからヴォルガ川とカマ川を汽船でウラル山脈の西端のペルミまで行き、さらに鉄道でオビ川の支流のチュメニに達します。そこからスレチェンスクまで4千数百キロをバイカル湖を船で渡ったほかはことごとく馬車で行き、最後にアムール川を汽船で下って7月5日北サハリンの対岸の港町ニコラエフスクに到着しました。

チャーホフはこの旅で得たシベリアの自然の印象について、ウラルからエニセイ川までは、「オビ川のいくつもの支流の荒涼とした陰鬱な岸べ—これが、最初の二千キロが記憶に残すもののすべてだ」と述べ、シベリアの「比類のない自然、雄大な、美しい自然は、ようやくエニセイ川を過ぎて始まる」と記しています。

そして「密林地帯を通っているあいだ、たえず鳥の歌、虫の声があふれていた。…道のべの森のなかの草地や森の縁には、やさしい空いろ、薔薇いろ、黄いろの花が咲きみだれている」と5月のタイガを讃えます。そして「シベリアの密林の迫力と魅力は、巨木にあるのではなく、・・・渡り鳥ででもなければ見とおせないその果てしなさにある」と続けます。森林火災についても「巨大な密林にとってたかだか二、三十キロが何だろう」、火災跡には「今では森が生い茂って熊たちが平然とうろつき、蝦夷雷鳥が飛びまわり」と述べ、シベリアのタイガは「ふつうの人間の尺度で物を律することはできない」と絶賛しています。

ビキン川のシマフクロウ

一般にシベリアはロシア連邦のウラル山脈分水嶺以東の太平洋沿岸までをいい、地形的には西シベリア低地、中央シベリア、南シベリア山地、北東シベリア山地および極東地方の5地域に分けられます。また行政的にはウラル連邦、シベリア連邦、極東連邦の3連邦管区に区分され、極東連邦管区はプリモルスキー地方（沿海地方）、ハバロフスク地方、アムール州。カムチャツカ地方、サハリン州、マガダン州、チュコト自治州など11の地方・州に区分されています。

シベリア北部の広大なツンドラ地帯の南には森林ツンドラをはさんでシベリアの誇るタイガと呼ばれる大森林地帯があります。タイガの樹種はマツ、カラマツ、モミなど針葉樹が圧倒的ですが、極東地方の南部ではニレやシラカバなどの広葉樹

林があるのが特徴で、沿海地方のタイガではシベリアトラやアムールヒョウが生息します。

この沿海地方のタイガで7年間を過ごし、野鳥の生態を研究し、シマフクロウの謎を解明、ビキン川流域の自然の秘密と魅力を描いたユーリー・B・プキンスキー博士（レニングラード大学脊椎動物生態研究室上級研究員）の『ビキン川にシマフクロウを追って アムールの自然誌』（千村裕子訳／平凡社／1989）が、私たちに遠かったシベリアをぐっと引き寄せてから30年になります。

ビキン川はタタール海峡から日本海に面した沿海地方のシホテ・アリニ山脈の支脈に源を発し、アムール川にそそぐ川です。約400キロをいくつかの川筋に分かれて流れ、大小の原生林の無数の島をつくり、25～30m以上のチョウセンゴヨウなどのマツ科やハルニレなどの広葉樹の樹木がうっそうと茂り、サケ、ヒメマス、アムールイトウなど魚類の宝庫であり、春にはアカガエルやスズガエルの声が鳴りやみません。

シマフクロウの巣を発見

プキンスキー博士は沿海地方に調査に来て3年目の1970年4月末、原住民ウデへの猟師に案内されてビキン川のある島にテントを張って野営地とし、愛犬チュクと「ふたり」でシマフクロウの探索を開始しました。島は1㎏くらいあり、うっそうとした対岸の森と島を隔てて小さな支流や小川が流れています。一本一本の木の周りを歩き、樹洞を調べますが巣は見つからず、「ウィーフィー、ウィーフィー、ウィーフィー」と太い低音で鳴くシマフクロウの音が聞かれましたが、雨が降り続き洪水になり5月11日島を一旦引き上げ、野営地を変えました。ビキンの春は急ぎ足に過ぎ、ウワミズザクラが緑に色づき始めた頃、苔むした倒木に静かに止まっているシマフクロウにやっと出会いました。さらに巣探しのため危険を冒して直径3mの巨木に登ったり、シダの繁みで20mまでトラに近づき、威嚇のうなり声でそれと気づき道を譲られるなどしますが、巣の発見は翌年の春を

待たねばなりませんでした。

1971年5月8日、博士は枯れたニレの大木の樹洞の巣にいる完全に羽毛が生えた2羽のシマフクロウのひなをついに発見し、夢心地の中で歓喜します。上にいるひなは、そのまん丸いオレンジ色の眼で「まだ一度も見たことがない」人間を観察し続けていましたが、やがて樹洞に隠れました。巣のそばのブラインドで過ごした最初の夜、博士は驚くべき光景を目にします。

シマフクロウの雌雄の親がブラインドの上の枝に並んで止まり、注意深くお互いを眺めまわし、自分たちから目を離さずにいる幼鳥のほうをちらと見やると、2羽の親鳥が力いっぱい鳴き始めたのです。求愛の二重唱です。これまで求愛の歌は、雄の声だと思われていましたが、一条乱れぬ雌雄の二重唱だったのです。だいたい歌い始めるのは雄です。それでも雄がときたまぐずぐずしているときに雌が歌い始めることがあります。そういうときのモチーフは変わっていて歌も違った風聞こえます。しかし声の乱れに気がつく、雌はすぐ歌をやめ、次の歌を雄がはじめ、ふたたび低いホルンのような声が夜の川沿いに響き渡るのです。「おそらくシマフクロウほど求愛の歌に隠れた意味や力を込めている鳥はいないだろう」と著者は書いています。

シマフクロウの一日の活動は規則正しく、きまって午後8時ごろ巣のそばの所定の枝に並んで止まり、この二重唱を約10分間歌うことから始まります。二重唱が終わらぬうちから空腹に耐えかねたひなが騒がしい声を上げ始めますが、親鳥は最後まで歌い終り、それぞれ獲物を求めて森の闇に溶け込んでいきました。

プキンスキー博士はまたほかのフクロウとは違うシマフクロウの子育て特徴を発見します。巣のそばに雌より雄をよく見かけます。それは雄が主に巣とひなを守る役割をもち、見張りと給餌の両立には巣の近くで容易に捕れるカエルが主な獲物になります。一方、雌は長い間巣を離れてビギン川の支流で主に魚を捕ります。魚の捕獲は時間が

かかり樹洞の巣に帰る回数は少なくなります。しかも雌はそれだけではなく、前年生まれの子鳥に魚の捕り方を教え、ときどき餌を与えたりもしていました。

5月25日、その年初めての蝶、ミヤマカラスアゲハが現れ、巣立ちをしていたシマフクロウの2羽のひなが姿を消してビキンの春が終わりました。

極東をつなぐ鳥

その同じ1971年、日本ではシマフクロウが国の天然記念物に指定されました。シマフクロウは翼を広げると約180cmのアジア最大のフクロウで、極東に1種、ロシア極東の沿海地方のシホテ・アリニ山脈を中心にオホーツク海の南西沿岸や中国北東部（黒竜江省）の大陸集団と北海道中部・東部、サハリン島中部・南部、南千島（クナシリ島と多分シコタン島）の島嶼集団の2亜種がいます。（ロシア科学アカデミー極東支部生物学・土壌学研究所編『ロシア極東の鳥類』／2009年）

北海道では生息地域の分断化や消滅により個体数が減少し、1980年代には100羽以下になり、1993年に「種の保存法」で国内希少野生動植物種に指定され、保護対策が進められ、現在百数十羽まで回復し、南千島の集団を加えれば島嶼集団は約200羽と推定されます。一方大陸集団は800～1600羽が見積もられています。

シマフクロウは魚食性が高いため生息地には魚類が豊富な浅い川が必要であり、また直径1m以上の大木の樹洞に巣を作るため原生林のような古い森林が欠かせず、北海道のシマフクロウの個体数や生息環境の回復には、大陸集団の特徴や自然環境との比較研究の重要性が指摘されています。

北海道は最終氷期末の約1万年前までサハリン島を経て北ユーラシア大陸と陸橋でつながっていたため北海道にはロシア極東と共通した北方系の動物種が多く、シマフクロウのほかにヒグマ、シマリス、ヤマゲラ、エゾライチョウなどが生息します。現在シマフクロウの遺伝学的研究が、北海道大学などの研究グループとロシア科学アカデミー極東支部東アジア生物多様性研究センター（旧

生物学・土壌学研究所）の研究者により行われています。（増田隆一著『ユーラシア動物紀行』／岩波新書／2019年）

1974年5月18日、プキンスキー博士ら学術調査隊により、ビキン川上流のワタスゲが生い茂り、ツルコケモモが広がった沼沢地で、世界初めて自然状態のナベヅルの巣が発見されました。

ナベヅルはロシア極東のアムール川の中・下流域、沿海地方のホル川、ビキン川流域、中国北東部などで繁殖し、主な越冬地は鹿児島市の出水市で、山口県周南市八代や南朝鮮、中国東部でも越冬します。1988年にはビキンで初めてナベヅルの日ソ共同調査が行われました。

ロシア極東では75科557種（繁殖種424種）の生息が記録され、沿海地方では478種が報告されています。（前記『ロシア極東の鳥類』）ビキン川流域でプキンスキー博士が記録しているミヤマホオジロ、マヒワ、シロハラ、シベリアアオジ、マジロビタキなどの多くの小鳥のほか、ガン・カモ類、シギ・チドリ類の大群が春から初夏にかけて日本海を越え、また朝鮮半島や北海道・サハリンまたは千島列島・カムチャツカ半島を經由してシベリアのステップやタイガを目指します。

タイガよ永遠に

1990年の初夏からシベリア通いを続け、タイガの自然を撮影してきた動物写真家福田俊司さんの写真集『シベリアの大自然』（朝日新聞社／1995年）は、「ウスリーのアマゾン」と呼ばれる壮大なビキン川やチョウセンゴヨウの大樹の森林、悠然と森を歩くシベリアトラなど、かつてプキンスキー博士のレポートで魅せられたビキンのタイガを鮮やかな画像として再現しています。

長年シベリアの森を歩き回った福田さんは同書で、とくに沿海地方では春の山火事が頻発し、また山道がタイガの奥へ奥へと延び、森林伐採の傷跡が広がっていると、広大なタイガの深刻な環境破壊に対する強い危機感を早くから表明していました。

ビキン川上流のタイガには、ロシア極東固有の

希少種、カマバネライチョウが生息しています。日本のライチョウ同様に人を恐れない謎の鳥で、「黒いライチョウ」と呼ばれ、1972年春プキンスキー博士らによって抱卵中の鳥が発見され、一夏の繁殖の生態が記録されました。

カマバネライチョウは、オホーツク海南西沿岸から南の沿海地方のシホテ・アリニ山脈のウスリー川支流の流域およびサハリン島の北・中央部、中国北東部（黒竜江沿い）で繁殖します。抱卵中の卵を測定のため取り出しても大きな抵抗も逃げ出しもしない生態だけに、火災はもちろん山道の造成や森林の伐採などの影響が案じられます。

最近、沿海地方の大規模な森林火災は報じられていないようですが、シベリアの各地で定期的な大規模な森林火災が発生しており、2019年7月末にサハ共和国、クラスノヤルスク、イルクーツクなどの森林が数百万ヘクタールにわたり焼失し、地球温暖化の中で北極圏の氷解の加速などその影響の拡大が危惧されます。焼失したタイガの復元には100年以上の歳月を要するといわれますが、130年前チェーホフが信じて疑わなかったシベリアの密林の人知を超えた再生の生命力がいま試されています。

(ためさだ さだと さいたま市図書館友の会)